

留萌百年物語

今からちょうど百年前の明治43年、今日の留萌の礎を築く大きな節目の年を迎えました。この年、留萌築港予算が第26回帝国議会で可決、留萌築港事務所を開設、工事着手、また、五十嵐億太郎が朝鮮漁場の開発に着手。さらには留萌―深川間の鉄道開通、留萌電灯株式会社創立、留萌郵便局で電話交換業務が始まります。本特集では留萌の百年を振り返りたいと思います。

留萌線の開業

明治43年11月に全線の工事が完成し、11月23日に留萌深川間が開業しました。この区間には、留萌側から順に、留萌・大和田・幌糠・峠下・恵比島・沼田・筑紫・深川の各駅が設けられました。開業時の様子は「沼田駅から次第乗込む客が平均百名以上はあつたから、乗客総員数は少くも五百名はあつたらう、留萌は時ならぬ繁華の雑沓は現はしたが、併しこれは将来留萌の繁昌を想像せしむるものであらう」（『北海タイムス』明治43年11月26日付）と書かれています。

大和遠州流茶道

大和遠州流は、小堀遠江守政一を流祖とする遠州流諸派武家茶道の一つで、栃木県佐野に在住していた第17代家元加藤静月庵一照宗匠の高弟であった蓼沼紫英師（本名ナオ）が明治43年に留萌の地に居を構えて同派の第一歩を歩きました。

当時は、神社、寺院、医院の子女に茶道を手ほどきし、増毛、羽幌、深川管内、旭川管内、札幌まで出張教授をして、同派の茶道を広め、その功績により、昭和7年に17代より家元職を継承し、第18代静月庵となり日本古来の精神文化の伝承に力を注ぎました。現在も脈々とその文化は受け継がれ、今年の6月12日には、静月会開庵百周年記念式典が開催されました。

三船殉難

「誓い」戦争の終わった夏、昭和20年8月22日、樺太（サハリン）から小樽に向かっていた緊急引き揚げ船小笠原丸、第二振興丸、泰東丸の三船が、旧ソ連軍潜水艦の攻撃を次々と受けて撃沈や大破し、推定1、708人もの乗員、引き揚げ者が留萌沖の海底に消えた。この悲劇を永遠に忘れないことを誓いながら事件から50年経た今、鎮魂の祈りをこめ、恒久の平和を願うこの地にこの碑を建立する。

留萌の人には決して忘れることのできない、戦後の混乱期に起こった悲惨な事件です。



留萌線開通式当日の留萌駅舎



開庵百周年記念式典



樺太引揚三船殉難 平和の碑

五十嵐億太郎

現在の留萌の繁栄は五十嵐億太郎をぬきに語ることはできません。



留萌港周辺

明治6年青森県下北郡風間浦村下風呂に佐賀庄四郎の5男として生まれました。佐賀家は、礼受のニシン漁場開拓の祖となる8代目平之丞のとき、南部藩主から名字帯刀を許されるほどの由緒ある家柄でした。明治12年、億太郎が6歳の時、五十嵐綱治の養子となりました。明治20年イギリス人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行いました。その時から親子2代に渡る留萌の港づくりが始まります。綱治は明治36年に56歳でこの世を去りますが、死の床で億太郎に次のように遺言を残しています。「わが五十嵐家は漁業を基として今日あることができた。みな、郷土留萌のお陰である。鉄道も港湾もこれからだだが、私が考えていたことを立派にやりとげてくれ」。綱治の意思を受け継いだ億太郎は、増毛との築港誘致競争を繰り広げることとなります。

明治39年12月の第23回帝国議会において、東京帝国大学教授広井勇の熱のこもった証言により、増毛優位に傾きかけていた増毛築港を覆し、衆議院を通過します。貴族院では財源問題を理由に否決されますが、億太郎の招致により後の宰相、原敬内務大臣が留萌を視察した結果、明治43年に留萌築港が決定します。その後、港の発展のため、後背地の開発を行い産業振興に努めました。昭和4年には留萌鉄道橋樑株式会社を創立しますが、同年12月29日出張先の大坂にて息を引き取ります。奇しくも享年は養父綱治と同じ56歳でした。それから4年後、留萌港は完成します。

留萌100年の動き 1910年～2010年

- 明治43年 留萌北紀通郵便局（元町郵便局）が設置される
留萌築港事務所を開設・築港工事に着手する
五十嵐億太郎、朝鮮漁場の開発に着手
留萌電灯株式会社が創立される
留萌―深川間の鉄道が開通する
- 昭和11年 留萌港、国際貿易港に指定される
- 昭和20年 太平洋戦争終戦
- 昭和20年 留萌沖で樺太引揚船3隻が撃沈され、死亡・行方不明者1,708人が犠牲となる
- 22年 市制施行
- 27年 留萌港が重要港湾に指定される
- 30年 留萌市が財政再建団体に指定される
- 33年 元町で大火事があり、181棟（252戸）が灰に帰する
- 37年 留萌市が交通安全都市を宣言する
- 47年 ロシア連邦ブリヤート共和国ウラン・ウデ市と姉妹都市締結に調印する
- 59年 留萌市が平和都市を宣言する
- 61年 黄金岬海浜公園が完成する
- 62年 国鉄羽幌線が廃止される
- 63年 記録的な集中豪雨により、被害総額61億7,900万円となる
- 平成元年 海のふるさと館が開館する
- 2年 住之江町に市立留萌図書館が開館する
中国營口市と友好港湾締結の調印式が行われる
- 4年 留萌市が暴力追放・防犯都市を宣言する
- 5年 留萌高校とカナダのコートニー市の高校が友好校提携を結ぶ
- 8年 佐賀家番屋が国の史跡に指定される
- 10年 留萌千望高校が開校する
保健福祉センター「はーとふる」が開設される
- 13年 留萌市立病院が東雲町に移転する
- 17年 留萌市が健康都市を宣言する
- 18年 高橋定敏市長就任
深川―留萌高規格幹線道路 留萌幌糠IC開通
るもい健康の駅が開設される
若松勉氏野球殿堂入り
- 21年

〈おわりに〉
今日の留萌は数々の先人たちの想いにより世を繋ぎ発展をしてきました。今を生きる私たちが繋いでいく百年後の留萌はいったいどのような姿をしているのでしょうか。

【参考文献】

- 「新留萌市史」 留萌市
- 「新留萌市史 資料編」 留萌市
- 「留萌いまむかし」 福士 廣志
- 「郷土留萌建設の先覚者 五十嵐億太郎」 近藤 清徹

お問い合わせは
市・企画調整課
☎42・1809